感性を育んだ少女時代 韓国「木浦」と鷹巣

辻さんは、昭和9年、日本の植民地時代の朝鮮・木浦府に生まれました。祖父善右衛門が木浦に大きな農場を持ち、歯科医だった父・石上新一氏も有力者として安定した生活を送っていたようです。

しかし、4歳の頃、子どもの死病として恐れられた疫痢にかかり、父が奔走して手に入れた特効薬で助かったものの、薬の後遺症で虚弱な体質になってしまいます。

木浦では、韓国人少年が使用人として住み込み、辻さんの世話をしながら、ときには国語の先生にもなりました。また、この頃は生活が豊かだったため、家や隣人宅にあった絵本や児童書で、さまざまな知識を吸収しました。

父新一氏の姓「石上」は、大和（奈良）の石上神宮にゆかりを持つ養母の姓で、新一氏は日本歯学会の草分けとしても知られ、考古学などにも明るい方でした。

鷹巣時代は、鷹巣農林高校の考古学の指導者として陣場岱や大野台、大湯などの発掘調査を行っており、当時の出土品が辻さんを介し、旧鷹巣町に寄贈されています。

辻さんの母ミサヲさんは、阿仁湯口内出身。昭和初期まで辻家は豪農で、洋風の家には阿仁鉱山関係の外国人技師も出入りするなど国際色豊かで、ミサヲさんは、フランス人女性から西洋料理なども習ったといいます。

鷹巣時代、辻さんの同級生たちが家に行くと、ミサヲさんは貧しいにもかかわらずに手づくりのパンやオムレツなどをご馳走してくれたそうです。

また、ミサヲさんの兄・平助さんは教育にも熱心で、末妹のミサヲさんを、仙台のミッションスクールから東京の大学に学ばせました。

昭和初期にミサヲさんは鷹巣実科女学校で教壇に立っていますが、このときは、大正12年に平助さんが設立した「丸阿乗合自動車株式会社」の車で当時住んでいた米内沢から学校まで送られ、珍しがられた、というエピソードもあります。

ミサヲさんは、昭和7年に東京で石上氏と結婚し、朝鮮に渡りますが、引揚げてきたときには、阿仁の辻家はすでに没落していたため、鷹巣にあった同郷の辻留之助氏（「辻産業」創業者）の持ち家・通称「花月（旧料亭）」に身を寄せることになります。

一家は鷹巣では引揚者故の貧しい生活でしたが、辻さんは学校での恩師や同級生にも恵まれ、精神的には豊かな生活を過ごしました。当時小学校の担任だった寺田ヤシさんは、「感性が豊かで詩がとても上手、特に木浦では見たことがなかった『雪』をテーマとした詩や、母の『糧（かて）きざみ』などの生活詩が印象深い」。また、「卒業時の作文には『将来は作家になりたい』と書いていました」と語っています。

辻さんは晩年、伊達正宗や支倉常長にまつわる物語、そして母のふるさと阿仁鉱山の隠れキリシタンなどをテーマに歴史小説を書きたいと話していたそうです。特に阿仁の物語は「花の都」と題名まで決まっていました。

しかし平成11年、作家としては成熟期に入る66歳で帰らぬ人となりました。

■刊行された主な辻作品

●「虹のファンタジア」
昭和51年・新ロマン社

少女時代から宝塚ファンだった著者が、執筆当時大ヒットしていた宝塚の演劇「ベルサイユのバラ」を取り上げながら、宝塚の魅力について語った「宝塚讃歌」。古今東西の名作や映画との比較など引用資料も多く、研究書的な色彩が濃い。

また、この中には自伝的ロマンとして短編小説「りんごの花咲く頃」が収められている。

●「揺籃（ゆりかご）を動かす手」
昭和52年・新ロマン社

著者の祖父・善右衛門と愛人で父の養母となる石上由菊の生涯や、木浦時代の自分と家族の記憶を回想する形式で書かれた歴史小説的作品。終戦で日本に引揚げ、母のふるさと阿仁に身を寄せる場面が序章となっている。

この作品は、「戦前編」「戦中編」「戦後編」全3部作のうち、明治から第2次大戦が勃発するまで「戦前編」として書かれたもの。

●「さよなら鳳蘭～鳳蘭物語」
昭和54年・櫂書房

宝塚ファンの著者が、昭和50年代のトップスター鳳蘭の舞台「虞美人」を見てから彼女のとりこになり、中国人荘芝蘭としての生い立ちから結婚して退団するまでを追いながら、鳳蘭の魅力を紹介した作品。

当時、20万部のベストセラーとなった。

●「無弱花（ムクゲ）を知らなかった頃」
平成7年・世界日報社

木浦での12年間の回想記。戦時中から日本に引揚げるまでを、当時幼かった著者の視点で描く。

兄のように慕った住み込みの韓国人少年や、父の庇護を受けることになった韓国独立運動の志士との心の交流がその後の人生に大きな影響を与えたことなどが述懐されている。史実の正確さ、著者の記憶力の確かさに驚かされる作品。

▲鷹巣国民学校に転入学した頃（昭和21年）

2列目右端が辻さん。中央が担任の寺田ヤシ先生。「源氏物語」を原典で読むなど読書好きで、学校では友人から借りた「少女の友」や「ひまわり」など、当時人気の少女雑誌をよく見ていたという。

母・石上ミサヲさん
（1903-1987）

当時、鷹巣農林高校で被服科の教師をしていた頃の母・ミサヲさん。結婚する前、昭和初期にも一度鷹巣実科高等女学校の教壇に立っている。兄・平助が守っていた阿仁の実家は豪農で、出入りしていたフランス人女性から西洋料理を習ったという。

◀ＮＨＫ東北中学校音楽コンクール秋田県大会で優勝（昭和23年）

後列左端が学級担任で音楽の指導をされた後藤惣一郎先生。その右側2人目が本人。

当時、後藤氏の指導で「浜辺の歌」をはじめ成田為三の曲をよく歌った。為三は母・ミサヲさんの兄・平助さんの友人であり、為三の曲は母の娘時代からの思い出の曲でもあった。辻さんは後年、母の臨終に際し、枕元で歌った「浜辺の歌」が母の鎮魂歌となったエピソードを地元紙に寄稿している。

高校2年、運動会での仮装行列（前列中央）▶

級友たちと佐々木小次郎を演ずる（昭和26年）。宝塚が好きで、よく自分のアイデアで宝塚風の演出などしていたという。

宝塚の情報源は雑誌とラジオ。ラジオで宝塚の番組が放送される時間になると、冬でも電気屋の前に立ち、友人の角巻きに入りながら、放送が終わるまで聞いていた、と述べている。

この頃、鷹巣農林は「北方文芸」を発刊された佐藤有次郎氏（ペンネーム「鉄章」）や三日尻吉忠氏（ペンネーム「三樹茂」）など文芸活動に秀でた教師にも恵まれており、その文学的土壌の中で、ますます才能が磨かれたと思われる。